

第10回日本スポーツグランプリ 受賞者(功績)

顕彰区分1 当該スポーツを長年にわたり実践している個人またはグループ

1.	<small>ツカ</small> 田中 <small>ヒロオ</small> 博男	84歳(男性)	青森県	スキー、陸上競技	活動歴: 78年
<p>青森県という豪雪地帯の土地柄もあり、小学1年生の頃からクロスカントリースキーに親しみ、20歳からは冬はクロスカントリースキー、夏は陸上競技という季節に合わせた活動を行い、78年という長きにわたってスポーツ活動を実践してきた。定年後は精力的に競技大会に出場し、クロスカントリースキーでは長距離のスキーマラソンに参加する一方、陸上競技では各種マスターズ陸上競技大会に出場し、主に短距離部門で才能を開花させた。大会では、次々と日本記録・世界記録を樹立し、70歳代で記録したM70の200m・400m・800mの日本記録は今も破られていない。現在も、冬はクロスカントリースキーに親しむとともに、陸上競技においても、アジア大会・世界大会等国际大会に積極的に参加し活躍している。</p>					
2.	<small>タカノ</small> 高野 <small>タカ</small> 孝雄	85歳(男性)	栃木県	陸上競技	活動歴: 73年
<p>小学校6年生で陸上競技(主に投てき種目)を始め、現在に至るまで73年間、継続して競技に取り組んできた。社会人時代は大学OB会に所属し、全国勤労者陸上競技大会や県民スポーツ大会など各種大会に出場。50代以降は、日本のみならず世界のマスターズ陸上競技大会に参加し、全日本マスターズ陸上競技大会ではM70クラスの砲丸投で優勝、アジアマスターズ陸上競技台湾大会のM80クラス円盤投でも優勝を果たす等、輝かしい成績を修めてきた。現在は栃木県マスターズ陸上競技連盟会長を務める傍ら、80歳を過ぎた今なお積極的に身体を動かし、多くの選手と競い合うことを喜びとして、日々トレーニングに励んでいる。</p>					
3.	<small>スギタ</small> 杉田 <small>シヨコ</small> 良子	79歳(女性)	神奈川県	バドミントン	活動歴: 64年
<p>中学校からバドミントン競技を始め、高校時代には国民体育大会で2年連続の3位入賞を果たし、全日本選手権(ジュニアの部)で準優勝を飾った。社会人となってからも、国民体育大会優勝1回、準優勝3回、全日本総合選手権女子ダブルス優勝2回、シングルス優勝1回、混合ダブルス優勝1回、全日本実業団選手権団体戦優勝1回、準優勝1回という、数々の輝かしい実績を重ねた。近年においても、全日本シニア選手権の混合ダブルスで、2008年まで、驚異の13回連続優勝を果たす等、色褪せぬ輝きを放つ。現在でも、週に2回は体力・技術向上のため練習に取り組むほか、後進の指導や神奈川県バドミントン協会常務理事としての重責も担い、多くの会員から尊敬し信頼され、憧れの的となっている。</p>					
4.	<small>イナバ</small> 稲葉 <small>シゲオ</small> 茂男	99歳(男性)	静岡県	柔道、水泳、ランニング	活動歴: 81年
<p>13歳で剣道を始め、14歳からは柔道に取り組むようになり、日本体育会体操学校高等科(現日体大)卒業までは、選手として活動した。その後5年余りの軍役に挟みつつも、教育現場に身を置く中で生徒への指導の傍ら、共に稽古に励んだ。1946年に柔道五段を取得した後は、主に東海高段者大会等に出場し、1971年に柔道七段、1995年に柔道八段まで昇段する等、80代まで積極的に取り組んだ。90歳を過ぎてからは、健康維持のための運動として、地元スポーツクラブでの水泳やランニングに取り組み、白寿を迎えた現在も所属クラブ最高齢者として元気にスポーツを楽しみ、自己の管理に努めている。</p>					
5.	<small>フルタ</small> 古田 <small>ユタカ</small> 坦	81歳(男性)	山口県	剣道	活動歴: 72年
<p>小学校3年生の頃、剣道を始め、学校の大会で優勝したことを契機として、継続して稽古を行ってきた。その後、警視庁に所属して以降、本格的に剣道の鍛錬に取り組み、全日本東西対抗剣道特別選抜個人試合の優勝をはじめ、国民体育大会等において数々の好成績を残した。練士6段以上が集う全日本剣道演武大会には、2014年まで28年連続で参加している。また、全国の8段受有者から心技ともに円熟した選手を選抜して行う、全日本選抜剣道八段優勝大会では、1992年と1993年に優勝を飾り連覇を果たす等の偉業を達成し、現在では剣道界の最高段位である範士8段にまで上りつめた。今なお、常にテーマを課して日々の稽古を行うなど、飽くことない技術の向上に向け努力し続けている。</p>					

6.	オノノ 小野瀬	クニマサ 國正	93歳(男性)	茨城県	ボウリング、軟式野球、卓球	活動歴：78年
<p>幼少期から軟式野球、青年期から卓球を始め、多くの大会に積極的に参加した。壮年期以降はボウリングに親しみ、神奈川県大会では個人優勝及びハイゲーム賞を獲得した他、神奈川県代表として全国大会に出場する等、数々の活躍を重ねた。茨城県に移ってからも、定期的に練習に励むとともに、2014年の第1回全国長寿ボウラーボウリング大会オーバー90'に出場する等、全国規模の大会に参加している。毎年発行されている「全国長寿ボウラー番付」平成26年度版では横綱のランクに掲載された。地域医師会主催の健康イベントにスポーツ実践者として講師に招かれる等、体力、気力ともに充実した、動き、語り、楽しむスポーツ愛好家として、元気長寿高齢者を体現している。</p>						

顕彰区分2 当該年齢層において世界記録等を樹立した個人またはグループ

7.	せきかわ 関川	シゲヒサ 重久	82歳(男性)	埼玉県	水泳	活動歴：54年
<p>幼少から水泳に親しみ、中学から水泳部に所属し、高校時代にはインターハイ、国民体育大会に出場し、大学でも活動していたが、2年次に不整脈により退部することとなった。社会人では、ゴルフに親しんでいたが、51歳を機に健康のため、水泳競技を再開。54歳で初出場した日本マスターズ水泳大会では、背泳ぎ50m及び100m制覇の2冠を達成した。その後も水泳への熱意は衰えず、各種マスターズ大会で、50代から80代の各世代において、延べ50回の世界記録と111回の日本記録更新を達成し、現在も4個の世界記録、17個の日本記録は破られていない。国内外のマスターズ水泳界で高い評価を得ており、その姿は老若男女問わず生涯スポーツ実践者の手本となっている。</p>						
8.	ひじゃ 泥谷	ヒサミツ 久光	84歳(男性)	宮崎県	陸上競技	活動歴：66年
<p>青年時は仕事に従事しながら、ランニング等日々のスポーツ活動を継続的に取り組み、地域の運動会では、地区代表として活躍した。60代からマスターズ陸上競技大会に参加するようになり、特に、2012年に開催されたマスターズ陸上競技選手権大会では、M80クラスの200m走と400m走でそれぞれ世界新記録を樹立し、その記録は現在も3個の日本記録とともに保持している。今もなお、週3回、地元の運動公園等にてトレーニングに励み、さらなる新記録樹立のため鍛錬を重ねており、まさに生涯スポーツ実践者である。</p>						
9.	なかの 中野	ひろこ 陽子	79歳(女性)	東京都	陸上競技	活動歴：48年
<p>42歳からスキーを始め、海外のスキー場を巡る等没頭した。その後、70歳から始めた陸上競技で才能を開花させ、71歳で初挑戦したホノルルマラソンを4時間44分44秒で完走したことを皮切りに、75歳で挑戦したサロマ湖100kmマラソンを完走(12時間30分10秒、70代での100kmマラソン完走は日本人女性初)、大田原マラソン2012では3時間53分42秒で、W75クラスのマラソン世界新記録を樹立した。その他、各種マスターズ陸上競技大会において、W75クラスの3000m及び5000mで、それぞれ世界新記録を樹立し、マラソン世界記録と併せて、合計3個の世界記録を今も保持している。現在も1日15km、月間約200kmの走りこみを行うなど、日々のトレーニングに積極的に励んでいる。</p>						

顕彰区分3 当該スポーツにおいて顕著な実績を挙げた個人またはグループ

10.	ながい 長岡	ミツ子 三重子	101歳(女性)	山口県	水泳	活動歴：21年
<p>80歳で、膝のリハビリを目的に水中ウォーキングを始めたことを契機に、82歳の時に独学で水泳の練習を行うようになると、84歳で日本マスターズ水泳大会に初出場を果たし、88歳で世界マスターズ水泳大会に初出場して銅メダルを獲得した。さらに、90歳で初の日本記録を生み、91歳から専門的な指導を受けると、世界記録を次々と生み出した。100歳を過ぎた現在は背泳ぎを専門とするが、短水路女子1500m自由形では、100歳超の女性として世界初の完泳を達成した。(※背泳ぎでの完泳) また、自由形及び背泳ぎ合わせて25の(FINA公認)世界記録を保持している。今でも週3回、飽くなき向上心で競技に取り組む姿は、日本のみならず、FINA公式サイトでも紹介され、世界的にも大きな注目を集めている。</p>						

注) 年齢:平成27年9月25日時点